

実生活に生きる言語力をはぐくむ国語教室

～ 生徒が自ら学びとる「話すこと・聞くこと」の学習を目指して ～

目 次

I 研究の概要

1 研究主題	1－ 1
2 主題設定の理由	1－ 1
3 研究目的	1－ 1
4 研究仮説	1－ 1
5 研究の全体構想	1－ 2
6 研究経過	1－ 2

II 研究の実際

1 生徒と教師の実態調査	1－ 3
2 研究の基本的な考え方	1－ 3
(1) 実生活に生きる言語力について	1－ 3
(2) 本研究で目指す国語教室	1－ 3
3 主題に迫る3つの手立て	1－ 4
(1) 自ら学びとるための目標の明確化	1－ 4
(2) 自ら学びとるための形成的評価の工夫	1－ 8
(3) 自ら学びとる獲得型の学習活動の工夫	1－ 9
4 授業実践による検証と考察	
(1) 検証授業の概要	1－10
(2) 研究内容1「目標の明確化」について	1－11
(3) 研究内容2「形成的評価の工夫」について	1－12
(4) 研究内容3「獲得型の学習活動の工夫」について	1－15
(5) 3つの手立てを通した生徒の変容について	1－19

III 成果と課題

1 成果	1－20
2 課題	1－20
〈参考文献〉	1－20

I 研究の概要

1 研究主題

実生活に生きる言語力をはぐくむ国語教室
～ 生徒が自ら学びとる「話すこと・聞くこと」の学習を目指して ～

2 主題設定の理由

平成20年3月、生きる力をはぐくむという理念の具現化を目指し学習指導要領が改訂された。その主な改善内容の一つに言語活動の充実があり、学校教育全体で言語力を育成することが強調されている。また、国語科改訂の趣旨にも、「言語の教育としての立場を一層重視すること」や「実生活で生きてはたらし、各教科の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」が挙げられ、特に言葉を通した理解力や思考力、表現力、そして言葉で伝え合う能力が重視されている。このように言語力が注目される背景には、国際学力調査により明らかになった表現力、思考力の低下や、若者の言語力の低下、コミュニケーション能力の不足を危惧し解消したいという社会の要請がある。また、社会の大きな変化により、他者との対話や豊かな言語文化に触れる機会が乏しくなったために、子どもたちは、言語で伝える内容が貧弱になり、言語に関する感性や知識、技能が育ちにくくなっているとの指摘もある。よって、このような社会を生きる子どもたちの言語生活を豊かにするためには、学校教育において、自分の考えを分かりやすく伝え、互いの思いを言葉で伝え合う言語力をはぐくむことが重要だと考える。

本校においても、生徒の言語力、とりわけ話す力や聞く力の充実が望まれる。これまでも、人前で話す力を付けるために、学級や集会の中でスピーチや発表の場をできるだけ多く設けてきたが、堂々と自信をもって話すことのできる生徒はそう多くない。また、学級活動や教科等の学習における話し合い活動の様子を見ても、全員が参加して互いの考えを伝え合うような話し合いになっていないことが多い。

さらに、指導者側の実状を考えると、これまで多くの指導者が、「話すこと・聞くこと」の指導に対してどちらかと言えば消極的な傾向にあったのではないかと推察する。その原因は、音声言語の指導における、指導と評価の曖昧さにあるのではないだろうか。自分自身のこれまでの指導を振り返っても、「話すこと・聞くこと」の指導よりも、「読むこと」や「書くこと」、「言語事項」の指導に重きをおく傾向があった。そして、「話すこと・聞くこと」の授業においては、発達の特性に応じた指導目標の設定が曖昧で、どの学年の指導も類似の言語活動の繰り返しに終わっていたのではないだろうか。

このように考えると、社会の要請に応え生徒のよりよい言語生活を実現させるためには、学校生活や家庭生活、社会生活で実践できる言語力、特に話す力・聞く力をはぐくむ必要がある。学校教育においてその中核となるのは国語科であり、国語科における「話すこと・聞くこと」の授業をこれまで以上に改善しなければならないと考える。また、そのためには、まず教師自身が明確な目標をもとに指導するとともに、生徒自身が自ら学びとる授業を展開することによって、生徒に実践力と自信を付けさせることが必要ではないかと考える。

そこで、研究主題を「実生活に生きる言語力をはぐくむ国語教室」とし、副題として「生徒が自ら学びとる『話すこと・聞くこと』の学習を目指して」と設定し研究を行うことにした。本研究では、まず生徒自身が目的意識をもって学習できるよう到達目標を分かりやすく示すとともに、自らの学習状況を把握させながら学習意欲を継続させるための手立てを工夫していきたい。また、学習指導過程に獲得型の活動を設定し、話す技術や聞く技術を、体験の中から生徒が自ら学びとる学習を目指したい。このような授業を展開することで、生徒が「話すこと・聞くこと」の実践力と自信を高め、今後、日常の様々な場面で言語力を発揮できるようになると考え、本主題を設定した。

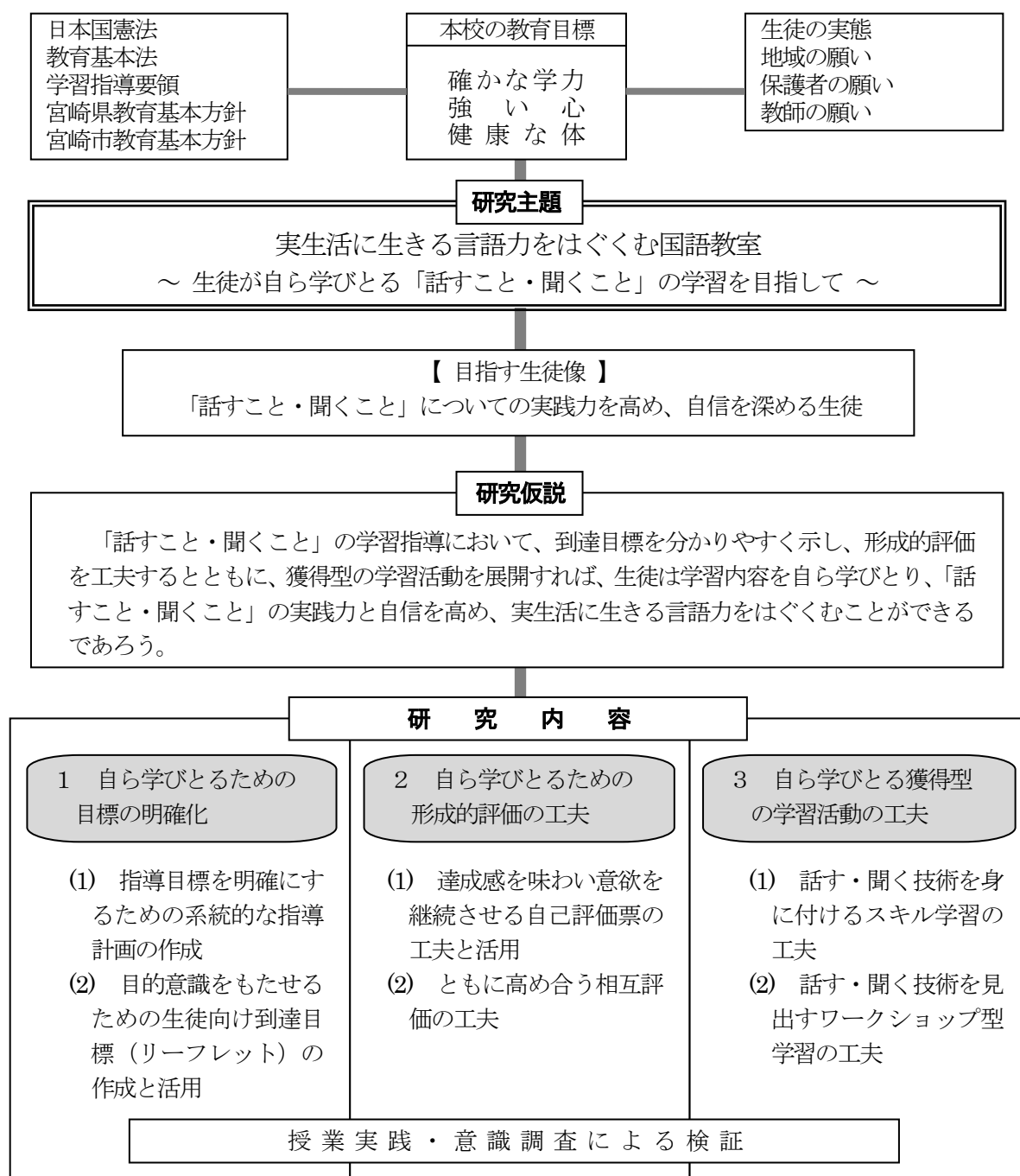
3 研究目的

各教科等の学習や学校生活をはじめとする実生活において、生徒が自信をもって「話すこと・聞くこと」を実践できるようにするために、生徒が目的意識をもち、必要な知識や技能を自ら学びとることのできる学習指導法を究明する。

4 研究仮説

「話すこと・聞くこと」の学習指導において、到達目標を分かりやすく示し、形成的評価を工夫するとともに、獲得型の学習活動を展開すれば、生徒は学習内容を自ら学びとり、「話すこと・聞くこと」の実践力と自信を高め、実生活に生きる言語力をはぐくむことができるであろう。

5 研究の全体構想



6 研究経過

月	研 究 内 容	備 考
4	研究主題、副題の設定、研究計画の立案	
5	理論研究、実態調査（生徒）、研究概要の決定	大淀中学校
6	理論研究、指導の目標、内容、評価規準の整理、形成的評価の工夫	
7	指導計画の作成、第1回検証授業、検証授業の分析・考察	大淀中学校
8	意識調査（指導者）、理論の再構築、研究の中間まとめ	県国研夏季研修会
9	理論研究、生徒向け到達目標の作成	
10	理論研究、獲得型の学習活動の工夫	
11	研究の中間まとめ	
12	第2回検証授業、検証授業の分析・考察、研究のまとめ	大淀中学校
1	研究報告書の作成	
2	研究発表の準備	
3	研究発表	

Ⅱ 研究の実際

1 生徒と教師の実態調査

本研究に先立ち、生徒の国語の学習に対する興味・関心や、国語の能力についての自己認識の傾向を把握するために実態調査を行った。調査の対象は、研究実践学校の第1学年全員と第2、3学年（抽出学級）の生徒、計338名である。また、宮崎県内の中学校国語教師37名を対象に、各領域についての指導の実態と指導上の問題点をつかむために実態調査を行った。

これらの実態調査のうち、「話すこと・聞くこと」に関わる主な調査結果は以下の通りである。

《 生徒の実態 》

まず、学習内容に対する興味・関心は、「話すこと・聞くこと」（63％）が最も高く、次いで「言語事項」、「読むこと」、「書くこと」の順であった。また、言語力に関わる表現する力については、書くことにはある程度の自信をもっているが、話すことについては、65％の生徒が自信のなさを感じているという結果が得られた。自信のない理由としては、主に「分かりやすく伝えることの難しさ」を挙げている。

《 教師の実態 》

指導の難しさを最も感じる領域として、46％の教師が「話すこと・聞くこと」を選んでいる。理由としては、その多くが評価の難しさを挙げている。また、「話すこと・聞くこと」の授業実施状況について、1年生担当の45％、2年生担当の51％、3年生担当の66％が配当時数を確保できていないという実状も明らかになった。理由としては、他領域の指導に時間を使っているためという回答が最も多かった。

このような実態を踏まえると、やはり「話すこと・聞くこと」についての授業及び評価を改善し、生徒の実践力と自信を高める学習指導を目指すことが必要だと考える。

2 研究の基本的な考え方

（1） 実生活に生きる言語力について

言語力について甲斐睦朗氏（元国立国語研究所所長）は、著書の中で国語力と対比させて次のように述べている。

国語力が、日本人の身につけるべき国語の知識や教養にまで範囲を広げた言葉の力を意味するのに対して、言語力は思考力や想像力、そして、それらを適切に表現する言葉の能力を意味する。（「言語力を育成する学校」甲斐睦朗、奥水 かおり／編 より引用）

これを受けて、本研究では言語力を、「思考を整理して伝えたり、互いの考えを伝え合ったりする言葉の能力」と捉える。

また、本研究では言語力をはぐくむ場を国語科の授業とし、その言語力を生かしさらに磨いていく場を実生活と捉える。つまり、他の教科等の学習や学校生活、そして家庭生活や社会生活など、国語科の授業を離れた生活の場をすべて実生活と考える。よって、国語科で育てる言語力は、他の教科等の学習や学校生活をはじめとする実生活に生きる言語力と捉えることができる。

（2） 本研究で目指す国語教室

本研究では、国語科の授業を国語教室と表現し、言語力をはぐくむ中心となる教室をイメージした。つまり、国語教室（国語科の授業）を一步踏み出した時点から生徒の言語力を生かす実生活が始まると考える。

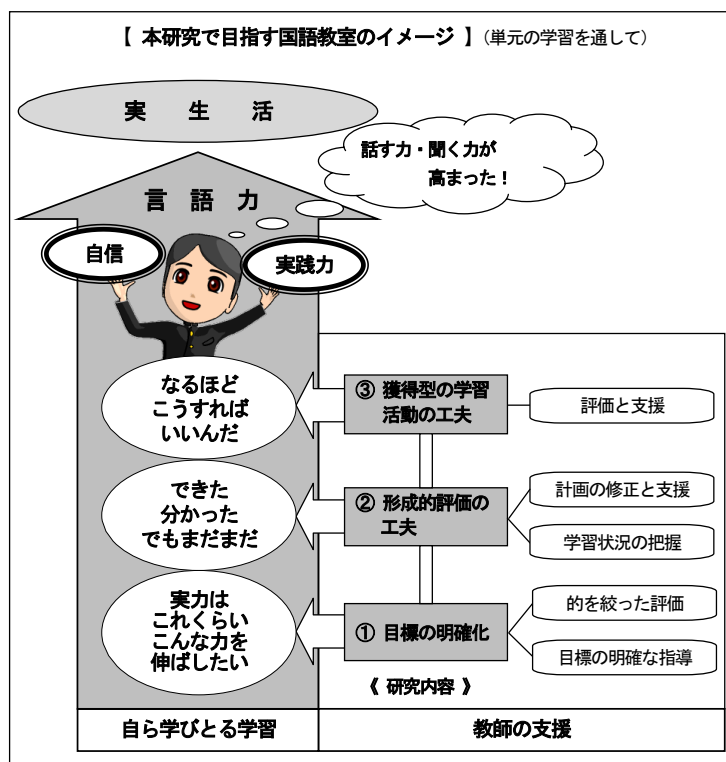
この国語教室は、単元の授業を通して、実生活に生きる言語力をはぐくむことを目指す。この言語力をはぐくむための鍵となるのは、生徒の実践力と自信を高めることだと考える。そして、この実践力と自信は、教師から教わるだけでなく生徒が自ら学びとる学習によって高められると考える。

この自ら学びとる学習は、生徒自身が「話すこと・聞くこと」の能力を自覚し目的意識もつことが前提となる。また、学習活動を通して知識や技能を自ら獲得するとともに、自己の学習状況を確認しながら進めることが必要である。そこで、本研究では、「目標の明確化」、「形成的評価の工夫」、

「獲得型の学習活動の工夫」の3つの手立てをとることによって、生徒が自ら学びとる学習を目指した。

右の図は、本研究で目指す国語教室のイメージを図に表したものである。このように、単元を通して①～③の手立てをとることによって、生徒は自ら学びとる学習を展開し、「話すこと・聞くこと」の実践力と自信を得ることができ、授業で身に付けた言語力を実生活に生かすことにつながるものと考え。

3つの手立てと自ら学びとる学習との関わりについては、以下に示した通りである。



① 目標の明確化

まず、学習指導要領の目標と内容を系統的に整理し、評価規準を設定することで、教師は各学年の指導事項を把握し、明確な目標をもって指導にあたることができる。また、的を絞った指導と評価を行い、系統表をもとに発達の特性に応じた支援を行うことができると考える。

また、生徒向けの到達目標を分かりやすく示すことで、生徒は1年間または3年間で目指し身に付ける能力を段階的に知ることができる。また、到達目標に照らして自己の能力を診断することで、「実力はこれくらい」だから「こんな力を伸ばしたい」という意識をもつことができ、具体的な目標をイメージしながら、見通しをもって学習を進めることができると考える。

② 形成的評価の工夫

自己評価票を活用した形成的評価により、生徒は、1単位時間ごとに自ら学んだことを確認し「できた」「分かった」という実感を得ることができる。また、学習上の課題から新たなめあてを見出し、「でもまだまだこんな力を付けたい」という思いで次の学習へと意欲を継続させることができると考える。教師は、1単位時間ごとの生徒の学習状況を具体的に把握し、それをもとに指導計画を修正したり個別の学習支援を行ったりすることができる。なお、自己評価票の記述は意欲に関わる総括的評価の参考にすることができると考える。

さらに、学習活動に相互評価の場を設定すれば、生徒は他者からの評価を自己評価につなげたり、学習の改善に生かしたりすることができると考える。

③ 獲得型の学習活動の工夫

獲得型の学習活動を設定し工夫することにより、生徒は体験を通して必要な知識や技能について、気づき、感じ、分ることができる。このような「なるほど、こうすればいいんだ」という実感が、実践力を高めるためには不可欠だと考える。また、この学習活動を通して教師は生徒の活動を評価し、個別の支援を行うことができる。

3 主題に迫る3つの手立て

(1) 自ら学びとるための目標の明確化

① 指導目標を明確にするための系統的な指導計画の作成

新学習指導要領では、これまで中学2、3年生でくられていた目標及び内容が、各学年に分けて示された。よって、これまで以上に学年ごとの指導内容が明確になった。そこで、改めて小学校から高等学校までの各学年で、何を目指しどのような力を付けさせるのかを整理し、指導目標が明確になるようにした。

ア 目標と指導事項の系統表

中学校学習指導要領解説国語編の付録4には、「各学年の目標及び内容の系統表（小・中学校）」が示されているが、目標については一続きの文章で表現されており、学年間の流れがつかみにくい。また、内容についても1つの項目に複数の内容が盛り込まれており活用しづらい面がある。そこで、「話すこと・聞くこと」領域についての目標を下記の4つの能力と態度に細分化し、内容を下記の7つの指導事項に分類し、系統的に整理した。

- 〔 目 標 〕 (1) 話す能力 (2) 聞く能力 (3) 話し合う能力 (4) 態度
〔 指導事項 〕 ① 話題設定 ② 取材 ③ 構成 ④ 話す
⑤ 聞く ⑥ 話し合う ⑦ 言語活動例

1 目標〔身に付ける能力と育てる態度〕

	(1) 話す能力	(2) 聞く能力
中3	目的や場面に 応じ 社会生活にかかわることなどについて相手の立場に 応じ て話す能力	表現の工夫を評価して聞く能力
中2	目的や場面に 応じ 社会生活にかかわることなどについて立場や考えの 違い を踏まえて話す能力	考えを比べながら聞く能力
中1	目的や場面に 応じ 日常生活にかかわることなどについて構成を工夫して話す能力	話し手の意図を考えながら聞く能力
小6	相手や意図に 応じ 、考えたことや伝えたいことなどについて、的確に話す能力	相手の意図をつかみながら聞く能力
小5	相手や目的に 応じ 、調べたことなどについて、筋道を立てて話す能力	話の中心に気を付けて聞く能力
小4	相手に 応じ 、身近なことなどについて、事柄の順序を考えながら話す能力	大事なことを落とさないように聞く能力
小3		
小2		
小1		

このように、目標を4つに細分化して整理することで、能力ごとに学年間の流れをつかむことができ、発達の特性を考慮して目標を設定することができる。

例えば、「話題設定と取材」という内容を、2つの事項に分けて整理することで、身に付けさせる知識や技能が明確になり、指導に生かすことができる。

	(3) 話し合う能力	(4) 態度
	課題の解決に向けて話し合う能力	話したり聞いたりして考えを深めようとする態度
	相手の立場を尊重して話し合う能力	話したり聞いたりして考えを広げようとする態度
	話題や方向をとらえて話し合う能力	話したり聞いたりして考えをまとめようとする態度
	計画的に話し合う能力	適切に話したり聞いたりしようとする態度
	進行に沿って話し合う能力	工夫をしながら話したり聞いたりしようとする態度
	話題に沿って話し合う能力	進んで話したり聞いたりしようとする態度

2 指導事項

	① 話題設定	② 取材	③ 構成	④ 話す
中3	社会生活の中から話題を決める	多様な方法で取材する	自分の経験や知識を整理して考えをまとめる	語句や文を効果的に使い、資料などを活用して説得力のある話をする 場の状況や相手の様子に応じて話す ・敬語を適切に使う
中2	社会生活の中から話題を決める	多様な方法で取材する	異なる立場や考えを想定して自分の考えをまとめる	話の中心的部分と付加的な部分などに注意し、論理的な構成や展開を考えて話す 目的や状況に応じて効果的に話す ・資料や機器などの活用
中1	日常生活の中から話題を決める	人との交流を通して取材する	全体と部分、事実と意見との関係に注意して話を構成する	知識を生かして話す ・話す速度や音量 ・言葉の調子や間の取り方 ・相手に分かりやすい語句の選択 ・相手や場に応じた言葉遣い など

	⑤ 聞く	⑥ 話し合う	⑦ 言語活動例
	聞き取った内容や表現の仕方を評価する	自分のものの見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりする	話し合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫する
	話の論理的な構成や展開などに注意して聞く	自分の考えと比較する	相手の立場や考えを尊重し、目的に沿って話し合う
	必要に応じて質問しながら聞き取る	自分の考えとの共通点や相違点を整理する	話し合いの振り返りや、自分の考えをまとめる
			課題の解決に向けて互いの考えを生かし合う
			時間や場の条件に合わせたスピーチ、自分の表現の参考にする ・社会生活の中の話題について、相手を説得するために意見を述べ合う
			調べて分かったことや考えたことなどに基づく説明や発表、意見を述べる ・社会生活の中の話題についての討論（司会、提案者などを立てる）
			日常生活の中の話題についての報告や紹介、質問や助言 ・日常生活の中の話題についての対話や討論

【 目標と指導事項の系統表（一部抜粋） 】

「目標と指導事項の系統表」をもとに、「話すこと・聞くこと」についての中学校3年間の評価基準を作成した。教科書（光村図書）の教材に沿って、系統表で分類した指導事項①～⑦について、各学年で全てを網羅するよう振り分けて整理するとともに、評価の焦点化を図った。

な指導と評価を行うことができます。

⑦ 言語活動例	⑥ 話し合う	⑤ 聞く	④ 質問する
日常生活の中の話 題についての報告 紹介、質問や助言 日常生活中的の対話	自分の考えをまとめる 自分の考えをまとめる 話し合いの意義を理解して、発言したり聞き取り 話し合いを通して自分の考えを深めている	自分の考えと共通点や相違点を整理する 自分の知識や体験との共通点や相違点を整理する 話題や方向をとらえて的確に話したり、相手の発言を注意して聞いたりする 発表を聞いて、自分の考えをまとめている	必要に応じて質問しながら聞き取る 自分とは異なる意見や疑問点について、メモを取って質問している 記録をもとに、グループの意見交換の内容を簡潔にまとめている 話し手の意図を考え、質問しながら内容を聞きとっている

な指導と評価を行うことができます。

第 1 学 年					
3	10	5	4	月	指導事項
発表（発表する）	言葉（調べる）	発表（発表する）	発表（発表する）	教材名	
7	6	6	1	時間	
組（発表する）	言葉（調べる）	発表（発表する）	発表（発表する）	作品の中から詩を選ぶ。朗読しようとする。	① 課題設定
組（発表する）	言葉（調べる）	発表（発表する）	発表（発表する）	作品の中から詩を選ぶ。朗読しようとする。	② 取材
組（発表する）	言葉（調べる）	発表（発表する）	発表（発表する）	作品の中から詩を選ぶ。朗読しようとする。	③ 構成
組（発表する）	言葉（調べる）	発表（発表する）	発表（発表する）	作品の中から詩を選ぶ。朗読しようとする。	④ 話す

【 評価規準の一覧（一部抜粋） 】

指導目標については、教師だけでなく生徒自身にも到達目標として明確に示すことで、生徒は目的意識をもち、主体的に学習を進めることができるのではないかと考えた。そこで、前述の「目標と指導事項の系統表」にある①～⑦の指導事項を、生徒が身に付ける能力として、できるだけ生徒に分かりやすい表現に直し、リーフレットとして作成した。このリーフレットの活用によって、生徒は中学校で目指す「話す力・聞く力」について段階的に知ることができる。

到達目標（リーフレット）における、中学1年生から3年生までの、能力ごとの段階的な違いは、次に示した通りである。

① 話題 中1は「日常生活の中から」、中2・中3は「社会生活の中から」と話題選びの範囲が広がる。

② 取材 「人との交流」から「多様な方法」へ、中3になると「自分の経験や知識の中に」材料を求めるというように発展する。

③ 構成 最も積み上げの要素が顕著な項目である。中1は「分かりやすい話」にするための基本的な構成を目的とし、中2では「筋道の通った話」、中3では「説得力のある話」へと、より論理的な構成を目指す。

中1で目指す「話す力・聞く力」

話題 日常生活の中から選ぶ(学校、家庭、地域など)

取材 人との交流を通して材料を集め整理する(家族、友人など)

構成 「全体と部分」「事実と意見」との関係に注意して構成する

全体 ①伝えたいこと(意見)を明確にする ②根拠となる事実や話す材料を選ぶ ③分かりやすい組立てを考える

部分 ①相手の反応を確かめながら話す(うなずき、表情など) ②小学校で学習した知識を生かして話す

話す ①話す速度や音量・言葉の調子や間の取り方 ②分かりやすい語句の選択 ③相手や場に応じた言葉遣い ※文末表現に注意する(事実と意見を区別する)

聞く ①必要に応じて質問しながら聞く ②聞き取ったことを自分の考えと比べて、「同じ点や異なる点」を整理する

話し合う ①話題の方向をとらえて的確に話す(だれと、何について、何のために) ②相手の発言を注意して聞く ③自分の考えと比べまとめていく

国語で学ぶ言語活動
 ☆報告や紹介(質問、助言) ・1分間スピーチ
 ☆対話や討論 ・グループ・ディスカッション

【 中学1年生用のリーフレット 】

④ 話す 中1は「相手」を意識した基本的な話し方と、「小学校で学習した知識を生かして話す」ことを目指す。中2は「論理的な展開や構成」に加え、「資料や機器を効果的に使って話す」ことを目指す。中3では「臨機応変」な話し方や「敬語を適切に使って話す」ことへと発展する。

⑤ 聞く 中1は「質問」したり「自分の考えと比べ」たりしながら聞くことを目指し、中2からは論理の「展開に注意して聞く」ことや「賛成・反対等の判断」をすることを旨とする。中3では「話の内容や表現の仕方を評価しながら聞く」ことへと発展する。

中2で目指す「話す力・聞く力」

話題 社会生活の中から選ぶ(社会生活における問題など)

取材 多様な方法で材料を集め整理する(本、新聞、雑誌、TV、PCなど)

構成 「中心的な部分」と「付加的な部分」などの関係に注意して構成する

筋道の通った話 ①中心的な部分 ②意見とその根拠を明確にする ③聞き手を説得するための材料を選ぶ ④論理的で分かりやすい組立てを考える

話す ①論理的な構成や展開を考えて話す ②資料や機器などを効果的に使って話す ※グラフや表、写真や図などを取り入れた分かりやすい資料を工夫する

聞く ①話の要点や根拠をとらえ、展開に注意して聞く ②自分の考えと比べながら聞く ※賛成・反対、納得できる・納得できないなどの判断をする

話し合う ①相手の立場や考えを尊重し、目的に沿って話し合う ②互いの発言を検討しながら聞く ③自分の考えを広げる

国語で学ぶ言語活動
 ☆説明や意見発表 ・プレゼンテーション
 ☆討論(司会者、提案者などを立てる) ・討論 ・インタビュー

【 中学2年生用のリーフレット 】

⑥ 話し合う 中1は少人数での話し合いや基本的な討論を目指し、中2では「相手の立場や考えを尊重する」ことや論理性を重視したより本格的な討論を目指す。中3では、さらに発展させ「進行の仕方の工夫」や「互いの考えを生かし合う」話し合いを目指す。

⑦ 言語活動例 左側は、学習指導要領に示された言語活動例で、上記の話す、聞く、話し合うの内容を扱う活動例として記した。

右側は、生徒の使う教科書(光村図書)で扱う言語活動の様式を示した。
 ※ 平成22年度現在

中3で目指す「話す力・聞く力」

話題 社会生活の中から選ぶ(社会生活における問題など)

取材 自分の経験や知識の中に材料を求め整理する(必要に応じて取材する)

構成 語句や文の使い方、資料活用の仕方を工夫する

説得力のある話 ①伝えたい内容を整理し、論理的で分かりやすい組立てを考える ②語句や文の効果的な使い方を工夫する ③資料の見やすさや提示の仕方などを工夫する

話す ①場の状況や相手の様子に応じて話す ※聞き手の反応しだいで臨機応変に対応する ②敬語を適切に使う

聞く ①話の内容を評価しながら聞き、自分のものの方や考え方を深める ②表現の仕方を評価しながら聞き、自分の表現に生かす

話し合う ①話し合いが効果的に進むように進行の仕方を工夫する ②互いの考えを生かし合う ・よりよい結論を求めること ・少数意見を尊重すること ・違いを確認すること

国語で学ぶ言語活動
 ☆多様なスピーチ ・公的なスピーチ
 ☆相手を説得するための意見発表 ・課題解決のための会議 ・パネルディスカッション

【 中学3年生用のリーフレット 】

また、このリーフレットは授業の中で次のように活用させる。

- 1 生徒自身が学習前の自己の能力を自覚するために、単元の学習に関わる項目について自己診断し、自己評価票に記入する。
- 2 自己診断をもとに、「私の目標」（単元の個人目標）を設定する。
- 3 単元の終わりに、「私の目標」の達成度を評価するとともに、再度同じ項目について自己診断し、学習後の伸びを確認する。

（２） 自ら学びとるための形成的評価の工夫

生徒が自ら学びとる学習を促し、力を付けさせていくためには、目的意識をもたせ、単元を通して学習意欲を継続させていくことが大切である。このような観点から、本研究では形成的評価の考え方を取り入れる。形成的評価は、教育心理学者ブルーム (bloom. B. S) が提唱した完全習得学習理論の一つである。ブルームは、評価の目標と評価の時期の違いによって、診断的評価、形成的評価、総括的評価を区別して論じている。このうち、形成的評価の定義は次の通りである。

教育活動開始後、教育目標に応じた成果が得られているかどうかについて、教授・学習過程の途上で、把握・判断する評価。得られた評価情報をそれ以降の学習活動の改善に生かし、教育目標の達成を目指すことを目的とする。

（「月刊国語教育 2009 年 5 月号別冊 明日を拓く国語科重要用語辞典」より引用）

本研究では、この形成的評価を、到達目標に対する到達度や学びとった知識・技能を把握する評価と捉え指導に生かす。方法としては、生徒による自己評価と相互評価、教師による観察等を通して行う。この評価によって、生徒は自己の学習状況を把握し達成感を味わったり自ら改善を図ったりしながら主体的に学習を進めることができ、教師はその評価情報を指導の改善や個に応じた指導に生かすことができると考える。

① 達成感を味わい意欲を継続させる自己評価票の工夫と活用

形成的評価の観点から、単元の学習を通して生徒が主体的に学習を進めることができるよう、積み上げ式の自己評価票を作成し活用させた。この自己評価票の特徴は次の３点である。

- 1 単位時間の達成度や前時までの学習状況の流れが視覚的につかめるよう、4 段階評価の記入欄はすべて棒グラフ状とした。また、単元の初めと終わりの自己診断については、「よく身に付いている（70～100%）」「少し身に付いている（30～70%）」「あまり身に付いていない（0～30%）」の大きく 3 段階評価とし、およそ何パーセント身に付いているかという診断ができるようにした。1 単位時間の学習や個人目標に対する達成度を塗り固めていく活動の中で、生徒はより慎重に学習状況を振り返ることができる。また、自己の頑張りや伸びがグラフ状の形になって現れることにより、生徒は、達成感や充実感を味わい学習意欲を継続させることができるものと考ええる。
- 1 単位時間ごとの評価欄は目標に向かって進むイメージで、下から順に積み上げる形にした。また、自己評価票の最下部に「学習前の自分」についての自己診断の欄を設け、最上部には「学習後の自分」の自己診断の欄及び「私の目標」についての評価欄を設けた。これにより、生徒は、先を見通し、目標に向かって一時間一時間の伸びや達成度を確かめながら学習を進めていくことができるものと考ええる。また、前時の自己評価を反省材料として自己の学習を改善していくことができる。
- 1 単位時間ごとの評価欄に、学習を通して何に気づき何を身に付けたのかを振り返ることができるよう、記述欄を設けた。これにより、生徒は自己の学習状況（学びとったこと、疑問点、自己の課題等）を確かめ、次時の学習につなげることができる。そして教師は、この記述を参考に生徒の学習状況を把握し、次時の支援を行うことができる。

また、この自己評価票は、授業の中で次のような手順で活用させる。

- 1 単元の初めに、到達目標をもとに「学習前の自分」について自己診断をする。また、単元のおわりに「学習後の自分」について同じ項目で自己診断し、自己の伸びを確認する。
- 2 単元初めの自己診断をもとに、「私の目標」として自己の伸ばしたい力を明記し、その達成を目指して学習を進める。また、単元の終わりにその目標の達成度を確認する。
- 3 各単位時間の初めに、「私の目標」及び学習課題を解決するための個人目標を設定し、振り返りの時間に達成度を評価する。
- 4 振り返りの時間に、学習活動を振り返り、気付いたことや考えたこと、分かったことなど、自ら学びとった内容を記述する。

「話すこと・聞くこと」自己評価カード 1年()組()番()

話し合って考えよう～グループ・ディスカッション～

★ 学習後の自分 ★ (月 日)

① 自分の考えや伝えたいことを的確に話す力 ② 相手の伝えたいことをつかみながら聞く力 ③ 自分の考えと比べながら話し合う力

0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

あまり身に付いていない 少し身に付いている よく身に付いている

① ② ③

◇ 「私の目標」は達成できましたか？

1 2 3 4

「私の目標」

【学習を振り返る】

① 積極的に学習することができましたか。 ② 話し合いを通して自分の考えを深めることができましたか。 ③ 個人目標は達成できましたか。 ④ 学習を通して気付いたことや考えたことを書きましょう。

1 2 3 4

1 2 3 4

1 2 3 4

1 2 3 4

★ 学習前の自分 ★ (月 日)

① 自分の考えや伝えたいことを的確に話す力 ② 相手の伝えたいことをつかみながら聞く力 ③ 自分の考えと比べながら話し合う力

0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

あまり身に付いていない 少し身に付いている よく身に付いている

① ② ③

【自己評価票（積み上げ式）】

② ともに高め合う相互評価の工夫

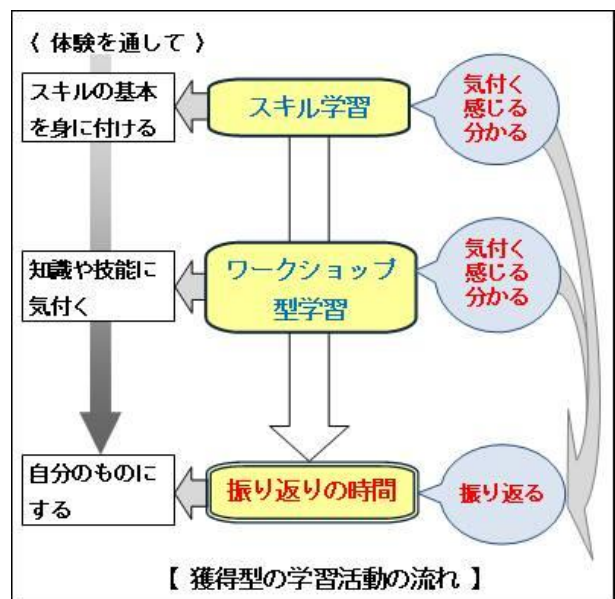
自己評価に相互評価を加味することで、生徒は自分の学習状況をより客観的に把握し、話し方・聞き方の優れた点や改善点に気づき、学習に生かすことができるものと考えた。そこで、個人目標の設定時や言語活動の中に相互評価を取り入れた。相互評価の観点については、単元の到達目標をもとに設定し、目指す力を常に意識させるようにする。また、個人目標については、「がんばる」などの抽象的なものにならないように、学習状況と本時の学習課題に照らして目標の妥当性を評価させる。

(3) 自ら学びとる獲得型の学習活動の工夫

本研究では、「話すこと・聞くこと」の知識や技能について、生徒が自ら「気付く、感じる、分かる」ことを目的として、獲得型の学習活動を位置づける。この学習活動によって、生徒は必要な知識や技能を頭の中で理解するだけではなく、体験を通して理解し自分のものにすることができると考える。

右の図に示したように、この学習活動では、1単位時間の中に、「スキル学習」、「ワークショップ型学習」、そして「振り返りの時間」という3つの活動を位置付ける。まず、「スキル学習」では、その時間に必要なスキルの基本を身に付ける。そして「ワークショップ型学習」で、そのスキルを生かしつつ、体験を通してさらに必要な知識や技能に気付く活動を行う。「振り返りの時間」には、本時の学習を通して気付く、感じ、分かったことを記述し、自分のものにすること。このような一連の学習活動を繰り返すことで、生徒が自ら獲得する学習を目指した。

「スキル学習」「ワークショップ型学習」の具体的な活動内容は次に示す通りである。



① 話す・聞く技術を身に付けるスキル学習の工夫

本研究における「スキル学習」とは、話すこと・聞くことに関するシナリオをもとにスピーチや対話、討論などを疑似体験し、必要な知識や技能を身に付ける学習を意味する。シナリオは、その時間の学習課題に関連のある内容で作成し、課題解決のためのヒントとなるようにする。この学習によって、生徒は様々な場面における具体的な話し方や聞き方を体験でき、場に応じた話し方や聞き方のポイントに気づき身に付けることができるものとする。

② 話す・聞く技術を見出すワークショップ型学習の工夫

「ワークショップ」とは、自ら参加・体験して共同で学び合ったり、何かを創出したりする活動を意味する。ワークショップの基本は、「説明」→「活動」→「振り返り」というスタイルの中で参加者自身が何かを学びとることにある。本研究では、この学習スタイルを応用し、「ワークショップ型学習」として学習活動の場を設定する。この活動において、生徒は、まず学習課題を把握し個人目標を設定するとともに、活動内容と目的、ルール等を確認する。そして主となる活動の段階では、できるだけ自由に自分たちの力で活動する。生徒は、この段階の試行錯誤を通して「気付く、感じる、分かる」といった学びを得ることができる。さらに、活動の終わりに学んだことを友達と共有したり練り上げたりしながら自分なりにまとめを行う。この学習によって、生徒は必要な知識や技能に自ら気づき、実感し、自分のものにすることができるものとする。

4 授業実践による検証と考察

(1) 検証授業の概要

① 単元名 話し合って考えよう～グループ・ディスカッション～

- ② 目 標
- 意見交換をする相手の意見を聞き、それに対する自分の立場を明確にしながら発言しようとする。〔関心・意欲・態度〕
 - 話し合いの話題や方向をとらえて的確に話したり、それぞれの発言を注意して聞いたりして討論を行い、考えをまとめることができる。〔話すこと・聞くこと〕

③ 指導計画と研究内容

時	主な学習活動	研究内容
1	1 スキル学習①に取り組む。 2 中1で目指す「話す力・聞く力」について確認し、自己診断を行う。 3 単元の目標を確認し、「私の目標」を設定する。 自分の考えと比べながら話し合う。 4 学習課題を確認する。 グループ・ディスカッションの方法を理解しよう。 5 グループ・ディスカッションの手順を知り、準備をする。 6 グループ・ディスカッションを行う。 7 グループの考えを報告し合い、学習のまとめをする。 8 学習を振り返る。	3－(1) スキル学習 1－(2) 生徒向け到達目標 2－(1) 自己評価票 2－(2) 相互評価
2	1 スキル学習②に取り組む。 2 学習課題を確認し、個人目標を設定する。 「よりよい話し合い」にするためにはどのようにすればよいだろう。 3 グループ・ディスカッションの例（前時のビデオ）を視聴し、よい点と改善したい点を挙げ、「よりよい話し合い」について吟味する。 4 「よりよい話し合い」について報告し合い、学習のまとめをする。 5 学習を振り返る。	3－(1) スキル学習 2－(1) 自己評価票 2－(2) 相互評価 3－(2) ワークショップ型学習
3	1 スキル学習③に取り組む。 2 学習課題を確認し、個人目標を設定する。 話し合うために自分の意見をまとめよう。 3 話し合いのテーマ（目的）を確認する。 『天神山のゴミを減らすにはどうすればよいだろうか』 4 話し合うための準備をする。 (1) 多様なアイデアを知る。 (2) 自分の意見を決め、その根拠と特長、問題点と解決方法を考える。 (3) 互いに主張し質問し合い、説得力のある説明の仕方を考える。 5 学習のまとめをする。 6 学習を振り返る。	3－(1) スキル学習 2－(1) 自己評価票 2－(2) 相互評価 3－(2) ワークショップ型学習

4	1 スキル学習④に取り組む。	3-(1) スキル学習 2-(1) 自己評価票 2-(2) 相互評価
	2 学習課題を確認し、個人目標を設定する。	
	話し合って問題を解決しよう。	
	3 グループ・ディスカッションを行い、評価し合う。	
	4 グループの考えと、話し合いの評価を報告し合い、学習のまとめをする。	
	5 学習を振り返る。	
	6 単元の学習を振り返る。	

(2) 研究内容1「目標の明確化」について

① 系統的な指導計画の作成

本単元では、前述した「評価規準の一覧」の7つの指導事項の内、「③構成」と「⑥話し合う」に的を絞って、下記の評価規準に従って指導した。

指 導 事 項		評 価 規 準
③構成	全体と部分、事実と意見との関係に注意して話を構成する。	自分の考えを相手に理解してもらえるように、筋道を考えて話を構成することができる。
⑥話し合う	話題や方向をとらえて的確に話したり、相手の発言を注意して聞いたりする。	話し合いの意義を理解して、発言したり聞き取ったりすることができる。
	自分の考えをまとめる。	話し合いを通して自分の考えを深めることができる。

「話すこと・聞くこと」の学習活動の中心は、言語活動である。この活動を行うには、「話すこと・聞くこと」のあらゆる能力が必要となり、指導者としては往々にして指導の手を広げがちになる。そのため、指導者は、言語活動を成り立たせるために多くのことを指導し評価することになる。これが、指導や評価の困難さを生み出している要因ではないだろうか。

本単元では、言語活動としてグループ・ディスカッションを扱ったが、この言語活動を通して、発言するための話の構成の仕方と、話し合いの方法を中心に指導した。系統的な指導計画をもとにした指導によって、これまで以上に指導事項と評価の焦点化を図ることができたと考える。

② 生徒向け到達目標（リーフレット）の活用

ア 単元初めの自己診断

単元の初めに、3学年分のリーフレットを提示し、各学年の到達目標について段階的に説明した。また、改めて「中1で目指す『話す力・聞く力』」について確認し、本単元を中心となる「話し合う」の以下3項目（ア）、（イ）、（ウ）について自己診断させた。

- （ア）話題の方向をとらえて的確に話す
- （イ）相手の発言を注意して聞く
- （ウ）自分の考えと比べてまとめていく

自己診断結果には個人差があったが、（ア）、（イ）、（ウ）のどの項目も平均すると「少し身に付いている」程度（平均値50%前後）であった。自己診断することによって、生徒は本単元でどのような力を目指して学習するのかを具体的に知ることができ、個人として必要な力についても認識することができたと考える。



【リーフレットを参考に自己診断し
個人目標を検討する様子】

イ 個人目標の設定

上記の自己診断結果をもとに単元を通しての個人目標を設定させた。リーフレットと自己診断結果を参考にしたこと、生徒は、単元の目標に沿った目標、また今の自分に合った目標を設定することができた。

ウ 単元終わりの自己診断

単元の終わりに、再度同じ項目で自己診断させた。その結果、（ア）、（イ）、（ウ）すべての項目で9割以上の生徒が平均30%前後の伸びを実感していた。また、個人目標についても、4段階評価で平均3.5という自己評価をしており、単元の学習を通して「力が高まった」と感じている様子がうかがえた。

さあ、学びのスタートだ！

☆ 学習前の自分 ☆ [11月 30日]

0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

① 自分の考えや伝えたいことを的確に話す力

② 相手の伝えたいことをつかみながら聞く力

③ 自分の考えと比べながら話し合う力

【 単元初めの自己診断 】

「話すこと・聞くこと」自己評価カード② 1年(4)組()

話し合って考えよう～グループ・ディスカッション～

★ 学習後の自分 ★ [12月 3日]

0% 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

① 自分の考えや伝えたいことを的確に話す力

② 相手の伝えたいことをつかみながら聞く力

③ 自分の考えと比べながら話し合う力

◇ 「私の目標」は達成できましたか？

「私の目標」 自分の考えや伝えたいことを力を付けた

【 個人目標の評価と単元おわりの自己診断 】

③ アンケート結果から

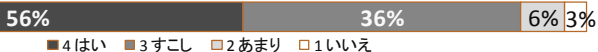
到達目標（リーフレット）を生徒に示し、自己診断や個人目標の設定に活用させたことについては、97%の生徒が「役に立った」「すこし役に立った」と答えている。

また、リーフレットの必要性については、92%の生徒が「あったほうが良いと思う」「すこし思う」と答えている。理由としては、「これからの学習や生活に生かせると思うから。」と答えた生徒が46%いたが、中には「あまり楽しくないから。」などといった回答もあり、リーフレットの意義が伝わらなかった生徒もいたようである。

リーフレットは、自分の力を確認したり目標を立てたりするときに役に立ちましたか



リーフレットは、今後もあったほうが良いと思いますか



以上のことから、作成したリーフレットは、生徒に目的意識をもたせることができ、学習内容に合わせた目標を設定するための目安になったことがうかがえ、有効であったと判断できる。ただし、リーフレットの提示の仕方や活用のさせ方については、今後検討していく必要がある。

(3) 研究内容2「形成的評価の工夫」について

① 自己評価票の活用

生徒自身が自己の学習状況を把握しながら主体的に学習を進めることができるよう、単元を通して自己評価票を活用させた。まず、各時間の導入段階で、本時の学習課題を記入させたうえで個人目標を設定させた。終末の振り返りの時間には、その時間の評価項目と併せて個人目標についての達成度を評価させた。これにより、生徒は教師の設定した学習課題を、自己の学習状況に応じて個人目標に置き換え、目的意識をもって学習を進めることができたと考える。

また、本研究では「振り返りの時間」を重視するため、自己評価の時間と学習を通して気づき、感じ、分かったことを記述する時間を十分に確保するよう努めた。



【 学習を振り返る生徒の様子 】

振り返りの記述欄には、その時間の気づきや達成感、問題点や課題、次時への意欲などについての記述が見られ、単元を通したそれぞれの生徒の変容がうかがえた。

以下は、抽出生徒2名の振り返りの記述と、そこからうかがえる生徒の変容である。

4時間目 学習課題 話しあって問題を解決しよう。

個人目標 みんなの話をきいて、自分の意見を言う

【学習を振り返ろう】

① 積極的に学習することができましたか。

② 話し合いを通して自分の考えを深めることができましたか。

③ 個人目標は達成できましたか。

④ 学習を通して気付いたことや考えたことを書きましよう。

今回、最後の授業だけでみんなが真剣にできました。今までの中で一番達成感のある授業。話し合いでは、これからその力を身につけていきたいです。

3時間目 学習課題 話しあのために自分の意見をきめよう。

個人目標 みんなが分かりやすい意見にする

【学習を振り返ろう】

① 積極的に学習することができましたか。

② 意見の相違と特徴、問題点と解決方法を示すことができましたか。

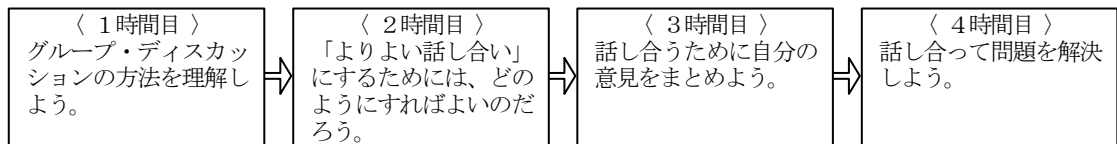
③ 個人目標は達成できましたか。

④ 学習を通して気付いたことや考えたことを書きましよう。

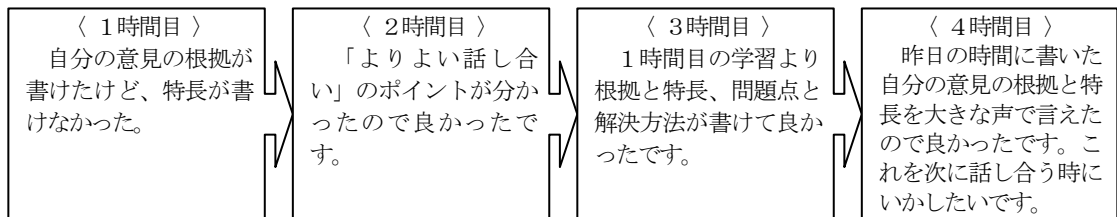
みんな自分の意見を話しあえてとても自分のいけに自信ができました。

【 個人目標の設定と自己評価、振り返りの記述 】

《 各時間の学習課題 》



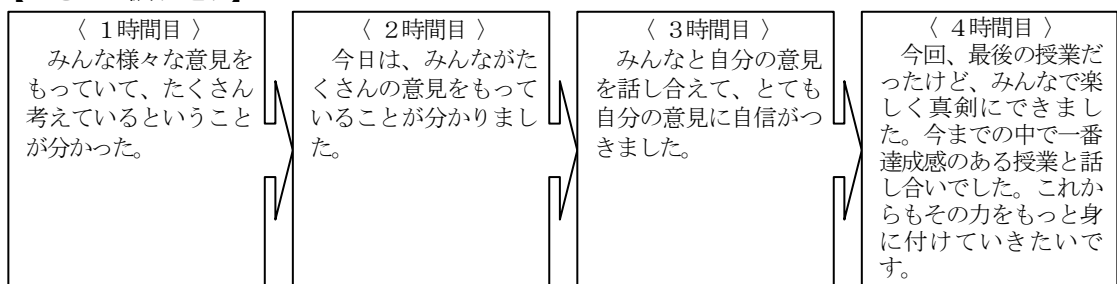
【Aさんの振り返り】



【Aさんについての考察】

Aさんは、とてもおとなしく授業中の発言も少ない生徒であり、単元を通して話の構成の仕方を助言したり、自己評価票にコメントを書いたりするなどの支援を行った。「私の目標」には、「的確に話す力を身に付けたい。」と書いた。振り返りを見ると、1時間目に書けなかった意見の特長や問題点等が3時間目には書けるようになったことが分かる。また、4時間目のグループ・ディスカッションにおいては、自分の意見を大きな声で言えたという達成感をもてたことがうかがえる。話す力についての自己診断も、学習前の40%（少し身に付いている）から80%（よく身に付いている）に向上しており、本単元の学習を通して、話すことに自信がもてたのではないかと考えられる。

【Bさんの振り返り】



【Bさんについての考察】

Bさんは、活発だが自分の意見に自信がもてないと感じている生徒であり、自己評価票にコメントしたり授業中に助言したりしながら堂々と発言できるよう支援した。1時間目から2時間目にかけては友達の発言について記述しており、グループ内での発言も実際に少なかった。しかし、スキル学習や話を聞く態度から、目標に向かって熱心に学ぼうとする姿勢がうかがえたため、その積極性を適宜称賛した。3時間目、友達と質問し合うワークショップ型学習を通して、自分の意見に初めて自信がもてたようである。4時間目の話し合いでは、これまで以上に生き生きと話し合う様子が見られた。自己診断についても、授業後は3項目ともに90%前後（よく身に付いている）の診断をしており、単元を通して徐々に学びとり達成感を味わうことができたのではないかと考える。

自己評価票の記述からは、上記のような変容とともに、さらに次のような点が確認できた。まず、多くの生徒が、1単元という流れの中で自己の学習状況を把握している点である。また、できたという達成感や充実感、または自己の課題についての記述が、次の学習活動に確実につながっているという点である。これは、先を見通し学習の足跡を確かめることができるという、積み上げ式の自己評価票の効果ではないかと考える。

また、このような生徒の記述をもとに、助言や称賛、励まし等の支援を充実させることができた。

② 相互評価の工夫

ア 適切な目標設定のための相互評価

個人目標を、前時の自己評価を生かしたもの、そして本時の学習課題に合ったものに設定できるよう、必ずペアで確認し合い必要に応じて修正するようにした。また、全体で数人の生徒の目標を紹介した。

このことで、生徒は、他の生徒の目指す姿を知るとともに、より適切な目標を設定しようとし、目的意識を高めることができた。教室全体としても、目標に向かって学習を進めていこうとする雰囲気を感じられた。

イ 話し合う力を高める相互評価

普段、生徒は、話し合う機会はあるけれども他のグループの話し合いを観察する機会はほとんどもない。また、言語活動は、客観的に見て初めてその特徴に気付くことも多い。そこで、グループ・ディスカッションの場面に相互評価を取り入れた。

10分間のグループ・ディスカッションを行う際、2グループずつの組になり交互に話し合いを評価させた。評価の観点については、到達目標の「話し合う」の以下3項目を設定し、グループとしての到達度がどうであったか、また良い点はどんなところだったかを評価させた。

(ア) 話題の方向をとらえて的確に話しているか。

(イ) 相手の発言を注意して聞いているか。

(ウ) お互いの考えを比べながら話し合っているか。

評価結果は学習のまとめで報告し合い 掲示させた。またこの時間の振り返りは、この相互評価も参考にさせた。振り返りの時間には、「話し合う雰囲気も大切だと思った。」「人の目を見ながら話し合う方がいい。」「自分たちでは分らなかったけれど、話し合いがスムーズだったと聞いてなんだかうれしかった。」などの記述が見られた。

この活動により、評価される生徒は、自分たちが気付かない点を教わり、評価する生徒は、他者の話し合い方を観察する中で新たな気付きを得ることができたのではないだろうか。



【話し合いを観察し評価する生徒】



【評価結果を報告し合う生徒】

③ アンケート結果から

「自己評価票」については、91%の生徒が「役に立った」「すこし役に立った」と感じている。では、どのように役立ったのだろうか。まず、その時間に学んだことを確かめる手段としては91%の生徒がその有効性を認めている。また、頑張ろう、力を伸ばそうなどの学習意欲の喚起については、84%の生徒がそのような気持ちになったと感じている。ただし、学習意欲にはつながらなかったと感じた生徒が15%（5名）おり、このことについては、評価情報をもとにした指導者側の支援不足として反省し改善しなければならない。

グループ・ディスカッションの「相互評価」については、振り返りの参考になったと答えた生徒が94%であった。また、振り返りの記述からも、相互評価が生徒の気付きや学びにつながったことが分かる。

自己評価カードは、学習を進めるうえで役に立ちましたか



自己評価カードによって、その時間に学んだことを確かめることができましたか



自己評価カードを使って、頑張ろうという気持ちや力を伸ばそうという気持ちになりましたか



相互評価は、自分たちの話し合いを振り返るうえで参考になりましたか



以上のことから、自己評価票の工夫により、生徒は目的意識をもち、1単位時間ごとに学習した内容を確認しながら学習を進めることができたといえる。また、相互評価の手法も生徒の自己評価を助ける材料になることが分かった。ただ、形成的評価として自己評価を位置づけ、生徒一人一人の学習意欲を継続させていくためには、学習状況を把握した後の個別支援をさらに充実させていかなければならない。

① スキル学習の工夫

A photograph showing several students in a classroom. In the foreground, a student in a dark blue school uniform is looking down at a white sheet of paper. To their right, another student in a dark blue uniform is also looking at a white sheet of paper. In the background, other students are visible, some looking at posters on the wall. The classroom has a green chalkboard and various educational materials on the walls.

【ペアでスキル学習を行う生徒】

根拠を示して主張することと互いに質問し合うスキル

グループ・ディスカッションを行うためには、まず自分の意見を主張するために、「なぜなら、～からです。」「それは、～からです。」を使って根拠を示す方法を身に付ける必要がある。また、他の人の発言をよく聞いて、さらに理解を深めるために質問する方法も知る必要がある。そこで、次のようなシナリオをもとに、主張と質問の仕方を体験できるように設定した。なお、質問とその回答については、2往復のやり取りを理想として示した。



〔2時間目のスキル〕

相手の主張を受け入れるように聞くスキル

【主な学習活動】 「よりよい話し合い」について吟味する。

グループ・ディスカッションは、「結論を見付けだすために行う共同作業」である。よって、自分の意見ばかりを主張したり、相手を攻撃したりしてはならない。そこで、本時は「よりよい話し合い」について吟味する活動を行った。その活動につなげるため、スキル学習では聞くという観点からシナリオを作成し、うなずきながら聞き、相手の主張を反復して確認する方法を提示した。

シナリオ2 相手の主張を受け入れるように聞くスキル	
※ □には、私または僕を入れます。○○には相手の名前を入れます。	
テーマ「都会と田舎では、どちらが過ごしやすいか」	
① □は、都会の方が過ごしやすいと思います。理由は2つあります。 まず、都会は、電車やバスが1日に何本も走っていて、行きたい所へすぐに移動することができるからです。 もう1つは、都会には、デパートやスーパーがたくさんあるので、買いたい物がすぐに手に入るからです。 だから、都会の方が過ごしやすいと思います。 ③ そうです。今の世の中は、働く人も勉強する人も、みんな忙しくなってきたと□は思います。だから、田舎のように不便な場所では生活がしにくいのではないかと思います。 ⑤ 現代人のすべてが忙しいわけではないと思いますが、少なくとも若者にとっては	うなずきながら受け入れる ※ おだやかな表情でうなずきながら聞く。 相手の主張を反復して確認する ② なるほど、○○さんは、便利のよさという点で都会の方が過ごしやすいと考えたんですね。 ④ そうですね。確かに、昔に比べたら現代人は忙しくなっているのかもしれませんが。だから、忙しい人にとっては、田舎は過ごしにくい場所とも言えますね。 ⑥ なるほど、□さんのような若者にとっては

〔3時間目のスキル〕

質問に対して説得力のある説明をするスキル

【主な学習活動】 話し合うために自分の意見をまとめ、互いに主張し合い質問してそれに答える練習をする。

本時は、グループ・ディスカッションの準備として、互いに主張し質問し合う活動を行った。質問に対しては、できるだけ説得力のある回答が望まれる。そこで、質問に対する答え方のスキル学習を行った。まず、質問の仕方については、シナリオ1、2を発展させ、相手の主張を受け入れたうえで質問する方法を取り入れた。また、回答の仕方については、「もし」を使って物事の本質を裏側からまとめ説明する方法を取り入れた。

シナリオ3 質問に対して説得力のある説明をするスキル	
※ □には、私または僕を入れます。○○には相手の名前を入れます。	
テーマ「都会と田舎では、どちらが過ごしやすいか」	
① □は田舎の方が過ごしやすいと思います。なぜなら、田舎は空気おいしいし、自然の中でのんびり過ごせると思うからです。 ③ 交通手段が少ないのは不便ですね。でも、もし日本中に電車やバスが走り、いつでもどこでも移動できる国になったら、美しい景色も静かな自然もなくなってしまいます。そんな日本になってもいいですか。 「もし」を使った説明 ⑤ なるほど、○○さんは、とにかく都会の便利さに魅力を感じるわけですね。でも、もし、便利な場所が過ごしやすい場所だとしたら人はなぜ休日に自然を求めて旅行をするのでしょうか。また、なぜ家の中に植物を置いたり花を育てたりするのでしょうか。人間は、	主張を受け入れて質問する ② そうですね。確かに田舎は自然が多くて健康的だと思います。でも、電車やバスの少ない田舎は不便だとは思いませんか。 ④ 自然がなくなるのは困ります。でも、都会には、自然が少ないかわりに、デパートやスーパーがたくさんあります。買いたいものがすぐ手に入るし、やっぱり都会の方が便利だと思いませんか。

【主な学習活動】 グループ・ディスカッションを行い結論をまとめる。また、話し合いを観察し合い相互評価を行う。

単元のまとめとして、本時は2回目のグループ・ディスカッションを行った。結論を導くためには、他者の意見と自分の意見とを比べながら話し合う必要がある。そこで、互いの意見を尊重しながら反論するスキル学習を行った。ここでは、相手の主張や質問の意図を受け入れ認めたとうえで自分の主張を行う方法（イエス・バット法）を取り入れた。

シナリオ4 相手の意見を尊重しながら反論するスキル	
※ □には、私または僕を入れます。○○には相手の名前を入れます。	
A	B
テーマ「席替えは、どのような方法で行うのがよいか」	
① □は、席替えはくじ引きがいいと思います。なぜなら、くじ引きならば平等に席が決まるからです。それに、誰と隣になるか、誰と同じ班になるか、わくわくしながらくじを引いていくので楽しくなります。 ③ ○○さんの「仲の良い友達どうして班を作る」という点について質問があります。自由な方法だと、仲間に入れない人が出てくるのではないですか。 ⑤ いいえ、そうは思いません。確かに、1学期のころはまとまりがありませんでしたが、体育大会や文化祭を通してずいぶんクラスのきずなが深まったと思います。 ⑦ 分かりました。 ⑨ 確かに、くじ引きはその時の運で決まるので、消極的という見方もできますね。しかし、運だからこそ、今まであまり話をしなかった友達と近くなる可能性もあります。だから、席替えは、このクラスがもっと仲良くなれるチャンスなのです。そう考えると、くじ引きも積極的だとは思いませんか。	イエス・バット法 ② □は、席替えは自由がいいと思います。それは、仲の良い友達どうして班を作ることができるからです。仲の良い友達どうしならば、班の活動が活発になり、クラス全体の活動も盛り上がると思います。 ④ そうですね、仲間に入れない人が出てきたら、とてもさみしい気持ちになりますね。しかし、もし、仲間に入れない人が出てくるとしたら、このクラスはまだまだまとまりのないクラスだということになります。○○さんは、このクラスがまとまりがなく仲の良いクラスだと思いますか。 ⑥ そうですよ。だから、今のこの時期ならば、きっと自由な席替えでクラスがもっと活発になると思うのです。 ⑧ □からも質問があります。くじ引きというのは、運で決まります。自分たちの席を時の運で決めるのは、消極的な方法だとは思いませんか。 ⑩ なるほど、そういう見方もできますね。

振り返りの記述には、「スキル学習をしたので答え方が頭に残っていた。」（3時間目）などの記述があった。中にはその時間の個人目標にスキルを意識して「相手の意見を聞くときにうなずけるようになる。」（2時間目）などの目標を設定する生徒も見られた。また、実際にその時間の学習活動の中で、そのスキルを意識した言葉のやり取りも多くみられた。よって、生徒にとってこのスキル学習は、その時間の学習を進めるうえでの参考になったことが分かる。

② ワークショップ型学習の工夫

「話すこと・聞くこと」の実践力は、人から教えられるだけでは身に付かない。やはり、体験を通して生徒が自ら「気付く、感じる、分かる」ことが不可欠だと考えた。そこで、自ら学びとる学習を目指して次のようなワークショップ型学習を行った。

ア よりよい話し合いについて吟味する活動

1時間目に話し合いの仕方を理解するために行ったグループ・ディスカッションの様子をビデオで視聴し、よりよい話し合いについて吟味する活動を行った。

生徒は、まず、個人で考え気付いたこと（よい点、改善点）を付箋紙に書いた。次に、グループでKJ法を用いて分類し、



【ビデオを見て「よりよい話し合い」を考える生徒】

「よりよい話し合いのポイント」をいくつかにまとめた。最後に、グループの考えを報告し合いながら、話し方、聞き方、話し合い方に分けて全体でまとめを行った。具体的なポイントとしては、次のような考えが出された。

話し方

- ・やさしい表情で話す
- ・相手の目を見て話す
- ・速さや声の大きさに気を付ける
- ・聞こえるようにはきはきと話す 等

聞き方

- ・大切なことはメモを取る
- ・話している人を見る
- ・相手の考えを理解する 等

話し合い方

- ・質問しながら話し合う
- ・問題の解決方法を考えながら話し合う 等

また、生徒が考えつかなかったポイント（分かりやすい言葉の選択、意見の比較）については、こちらから補足した。なお、全体でまとめたポイントは教室に掲示し、次時の学習で活用できるようにした。

この学習で、生徒が個人で考えたり、ペアやグループで話し合ったりして、よりよい話し合いの仕方について思考を深めている様子がうかがえた。振り返りの時間には、「ビデオを見て聞く側の勉強にもなった。」「次は、相手の話を最後まできちんと聞くようにしたい。」などの記述が見られた。生徒は、話し合うときの留意点について、単なる知識ではなく実感として学びとり、自分のものにすることができたのではないかと考える。



【KJ法で考えを分類する生徒】



【グループで吟味する生徒】



【教室に掲示した
「よりよい話し合い」のポイント】

イ 説得力のある説明の仕方を考える活動

グループ・ディスカッションは、結論を導き出すために行う言語活動である。よって、話し合いの中では質問し合い、互いの意見の特長や問題点をはっきりさせることが必要となる。そこで、実際に質問し合いそれに答える体験を通して、自分の主張の問題点や解決方法を確認し、説得力のある説明の仕方について考える活動を行った。10分間で3人程度の相手と活動した後、それぞれの意見や特長、問題点に対する解決方法等を修正した。

振り返りの時間には、「思いつかない問題点や解決方法が見つかった。」

「質問し合うことでいろいろな方向から考えることができた。」「自分の意見についてしっかりと考えることができた。」などの記述が見られた。この活動を通して、生徒は試行錯誤しながら、自分の考えを分かりやすく整理することができたと思う。



【質問し合い、説明の仕方を考える生徒】

③ アンケート結果から

「スキル学習」については、88%の生徒が「役立った」「すこし役立った」と答えている。その理由としては、「どのように話し合えばいいかわかったから。」という回答が最も多く、そのほかにも「どんな言葉を使えばよいか学習できたから。」「質問の仕方が分かったから。」等の回答が得られた。

「ワークショップ型学習」については、「ビデオを見て話し合う活動」「友達どうして質問し合う活動」についてアンケートを行った。結果は、グラフから分かるように、どちらの活動も90%前後の生徒が学習に役立ったと答えている。特に、「友達どうして質問し合う活動」については、話し合いの準備に役立ったかの質問に対し、66%の生徒が「はい」と答えている。実際に話してみることや質問してみること、質問に答えることを通して、生徒の思考がかなり深まったということがうかがえる。

スキル学習は学習に役立ちましたか



ビデオを見て話し合う活動で「話し合いのポイント」に気づくことができましたか



友達どうして質問し合う活動は話し合いの準備に役立ちましたか



以上のことから、「スキル学習」で得た知識や技能は、その後の学習活動を進めるうえで生徒の思考を助け、話したり聞いたり話し合ったりするときの技能として生かされたものと思われる。また、「ワークショップ型学習」は、話し合うために必要な知識や技能について生徒に気付かせる有効な手段だったといえる。特に、友達どうして質問し合って答えるというような活動は、生徒に試行錯誤を促し、話すための思考を活性化させることにつながった。なお、生徒が振り返りの時間に記した気付きや達成感は、自ら学びとったものとして生徒の中に蓄積されたと推察できる。

(5) 3つの手立てを通した生徒の変容について

「学びとる」という生徒の姿は、本研究で最も大切に考えた要素であり、その実現を目指して指導の手立てを工夫した。これまでに述べてきた授業実践における学習の様子や振り返りの記述から、生徒が目的意識をもち、1単位時間ごとの達成度や学習状況を確認しながら主体的に学習を進めたことが確認できた。

アンケートの結果、本単元の学習において、88%の生徒が「学びとったと感じた」「学びとったとすこし感じた」と答えている。理由としては、「自分たちで考えたり、問題を解決したりできたから。」「自分で気付くことがあったから。」「学習していくうちに、とても話し合いやすくなってきたから。」などといった回答が得られた。

また、アンケートの終わりに、生徒自身の学習の成果について尋ねた。それによると、『話す力・聞く力』が高まった」と答えた生徒が60%、「すこし高まった」と答えた生徒が40%という結果であった。

今回の学習は自分または自分たちで「学びとった」と感じますか



今回の学習をとおして話す力・聞く力が高まったと思いますか



以上のことから、3つの手立てによって、多くの生徒が、学習内容を「自ら学びとった」という思いをもつことができた。その自ら学びとった知識や技能がまさに生徒の実践力として身に付き、これからの実生活に生きるものとする。また、生徒全員が『話す力・聞く力』が高まった」と実感していることから、本研究の取組がわずかながら生徒の自信を引き出す契機になったものと判断できる。この自信こそが、学びとった実践力を実生活に生かすための原動力になるであろうと考える。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

- 「話すこと・聞くこと」領域の目標と指導事項、評価規準を系統的に整理したことで、各学年で指導すべき内容を明らかにすることができ、明確な目標のもとに指導することができた。
- 生徒向け到達目標（リーフレット）を活用したことで、生徒は見通しをもち、目標を明確にして学習を進めるとともに、単元を通して自己の伸びを確認することができた。
- 形成的評価の観点から考案した自己評価票の活用と相互評価によって、生徒は、学習意欲を継続させ、学びとったことを確認しながら学習を進めることができた。
- 目的の明確化と形成的評価に加え、スキル学習やワークショップ型学習といった獲得型の活動を取り入れたことで、生徒は、「自ら学びとった」「話す力・聞く力が高まった」と実感することができた。よって、本研究の手立てによって、生徒の自ら学びとる学習を促し実践力と自信を高め、実生活に生きる言語力の育成につなげることができたといえる。

2 課題

- 生徒向け到達目標（リーフレット）については、構成や表現を見直し、生徒にとってさらに分かりやすく活用しやすいものに改善していきたい。
- 形成的評価における教師の支援を、さらに充実させていきたい。
- 「話すこと・聞くこと」の学習における獲得型の学習活動について、さらに実践を重ね有効な手立てを工夫する。特に、スキル学習のシナリオの開発に力を入れていきたい。

〈 参考文献 〉

- 「小学校学習指導要領解説 国語編」（平成20年8月）文部科学省
- 「中学校学習指導要領解説 国語編」（平成20年9月）文部科学省
- 「話し合いと発表力トレーニング」生越嘉治／著（あすなろ書房）
- 「言語力を育成する学校」甲斐睦朗、興水 かおり／編（教育開発研究所）
- 「月刊国語教育2009年5月号別冊明日を拓く国語科重要用語辞典」河野庸介／編（東京法令出版）
- 「ワークショップ型授業で国語が変わる」上篠晴夫／編著（図書文化）
- 「音声言語の学力形成技法」野口芳宏／著（明治図書）
- 「言語力育成協力者会議（第8回）配布資料[資料5]」文部科学省
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/036/shiryo/07081717/004.htm)

〈 研究実践学校 〉 宮崎市立大淀中学校